

## 北海闡福寺と乾隆帝の白傘蓋仏信仰について

石濱 裕美子

### 目次

はじめに

#### 1. 国家鎮護の寺としての白傘蓋仏殿

- (1) 佛香閣を白傘蓋寺とした場合の問題点
- (2) 白傘蓋信仰のセンターとしての闡福寺
- (3) 『陳設檔』に見る闡福寺の旧観
- (4) 闡福寺の現状

#### 2. 乾隆帝の白傘蓋信仰

- (1) 雍和宮に見る白傘蓋仏殿
- (2) パンチェンラマが勅命によって記した白傘蓋儀軌
- (3) 裕陵地宮の白傘蓋真言

おわりに

### はじめに

清朝最盛期の皇帝乾隆帝が、チベット語の大蔵経をモンゴル語と満洲語に翻訳し、北京や熱河に多くのチベット寺を建てチベット仏教僧を供養するなど、チベット仏教に篤く帰依していたことはよく知られている。乾隆帝がチベット仏教を信仰することは、清朝とチベット、さらにはチベット仏教を信じるモンゴル世界を統合する上で非常に大きな政治的効果があったため、その実相の解明は三民族の歴史全体に関わる非常に重要な意義をもつ。

本稿は乾隆帝のチベット仏教信仰の中でも白傘蓋仏に対する信仰をとりあげ、彼が即位の初期より国家鎮護の仏として白傘蓋仏を奉じていたこと、その祭祀のセンターは北海の北にたつ闡福寺という大寺であったことなどを明らかにし、最後に乾隆帝の白傘蓋仏信仰全般とその歴史的意義などについて明らかにしていくものである。

乾隆帝とチベット仏教世界の関係を知る上で第一級の史料としては、乾隆帝の師僧チャンキャ二世=ロルペードルジェ (lcang skya rol pa'i rdo rje, 1717-1786 以下チャンキャ) のチベット語で

記された二つの伝記——一冊はチュサン=ガワントゥブテンワンチュク (chu bzang ngag dbang thub bstan dbang phyug) が 1787 年に記した通称小伝 (CNT1)<sup>(1)</sup>、もう一冊はトゥカン=ロサンチュエーキニーマ (thu'u bkwan blo bzang chos kyi nyi ma) が 1798 年に記した通称大伝 (CNT2)<sup>(2)</sup>——を挙げる事ができる。チャンキヤは乾隆帝の即位の当初よりその傍らにあつて、乾隆帝の仏教儀礼を主宰し、かつ、乾隆帝の意を汲んでチベット仏教世界において起きる様々な政治問題に関与した高僧である。そのため、彼の伝記は乾隆帝とチベット仏教世界の政治的・宗教的な関わりを知るための絶好の史料となっている。

また、本稿がチャンキヤ伝と並んで使用したのは、第一歴史檔案館に所蔵されている内務府檔案の中の『陳設檔』である。本史料は内務府の管理する宮中の仏堂や寺の毎年の財産目録(簿冊)であり、諸仏堂の配置やその中に祀られる仏像や仏画などの種類が記されていることから、乾隆帝をとりまくチベット仏教世界を具体的に知る上で非常に役立つものである。

## 1. 国家鎮護の寺としての白傘蓋仏殿

チャンキヤ大伝の第十三章「王城において寺院をたくさん建立し新しく僧団を確立し、諸方の衰退を救い、吉兆をいやまされた有様」(rgyal po'i khab tu gtsug lag khang mang du bzhengs shing dge 'dun gyi sde gsar ba btsugs pa dang, yul phyogs du ma'i rgud pa bsal te dge mtshan rgyas par mdzad pa'i tshul)には、チャンキヤが北京や熱河など清朝の宮廷内に数多くのチベット寺を建てたことが記されている。そしてこの章の冒頭には以下にみるように、年月は不明であるものの、乾隆帝が三層の巨大な仏殿を宮城の後方に建立し、そこに国家鎮護の力を持つ白傘蓋仏を祀ったことが記されている。

大皇帝(乾隆帝)が政治の護りのごときものをお考えになって、大宮殿の後方にある三層の仏殿の中に千手千顔の聖なる白傘蓋仏の巨大な像を建立した。その際、最勝の師僧(チャンキヤ)が監督をなさつて竣工の暁には落慶式も主催した。その式においてたくさんの高僧や衆僧が供養する際の儀軌を著作された。その右端に九層の仏塔がかつてあつたのだが、これを八層まで立てた時に空から火が落ちてきて全焼したので、その後には大西天というインド式の寺を建立して落慶した(CNT2, pp.354-355)。

この白傘蓋を祀つた三層の寺は、規模が大きいこと、また、国家鎮護のために建てられたということから、清朝のチベット仏教崇拜において、枢要な地位を占めるものであることは疑いない。それでは、この三層の白傘蓋仏殿はいずれの地にどのような形で存在していたのであろうか。

(1) Hans Rainer Kaempfe 1976 が本伝のドイツ語訳注を附し、影印テキストとともに刊行している。

(2) 本伝には陳慶英・馬連龍による漢語訳『章嘉国師若必多吉傳』(民族出版社, 1988)がある。

現在の中国の研究者はチャンキヤ大伝に見えるこの三層の寺を、一致して北京屈指の皇室の庭園頤和園のシンボル、佛香閣に比定している。たとえば、チャンキヤ大伝の漢訳を出版した陳慶英・馬連龍の両名は佛香閣が建立される以前に九層の仏塔があったことを指摘し、それが史料下線部の幻の九層の仏塔の故事と一致することから、この寺を佛香閣であると断定する<sup>(3)</sup>。そして、黄顥 1993, p.87, 王湘雲 1995, もこの両者の説を全面的に肯定して、佛香閣をチャンキヤ伝所載の白傘蓋仏の寺と見る。確かに佛香閣はチャンキヤ伝の述べるような大仏を祀るにふさわしい大楼阁でもあり、九層の仏塔の故事も一致することから、彼らの説は一見して妥当なように見える。

### (1) 佛香閣を白傘蓋寺とした場合の問題点

しかし、筆者は白傘蓋寺を頤和園の佛香閣に比定することに対して、以下四つの点で疑問を感じた。

まず一つ目には、上述のチャンキヤ大伝によると、白傘蓋寺は「宮殿の後方」に建てられたとあるのに対し、頤和園は宮殿の後方とはいえない難い西北郊外に位置すること。

二つ目には、同じくチャンキヤ大伝に見える「大西天」とは、頤和園の中にある建築物の名ではなく、紫禁城の西に隣接する北海の北岸にあるチベット寺の名であること。

三つ目には、1780年に乾隆帝の70歳の誕生日を祝うために北京を訪れたパンチェンラマ四世がこの寺とおぼしき白傘蓋の寺を訪れているが、文脈から見てもその寺の立つ位置は明らかに北海周辺であること。詳しく説明すれば、『パンチェンラマ四世伝』(P4N)によると、チベット暦の9月14日にパンチェンラマは白傘蓋の寺(gdugs dkar lha khang)と極楽寺(bde ba can gyi lha khang)において仏像などに韻文を献じて供養を行い、その後、旃檀佛の寺(tsan dan jo bo'i lha khang)で法要を行い、後に黄寺(lha khang ser po)に帰還し、翌日に舟で萬壽山(wang shu shan)に向かっている<sup>(4)</sup>。この旅程からみれば白傘蓋をまつる寺は頤和園(萬壽山)ではなく、極楽世界や弘仁寺(旃檀佛の寺)のたつ北海近辺にあることになる<sup>(5)</sup>。

四つ目は、佛香閣の本尊は少なくとも嘉慶帝の時代から観音菩薩であり、その直前の乾隆年間に限って白傘蓋仏であった可能性は低いこと。現在の佛香閣の本尊は、1989年に北京城内の弥陀寺から移されてきた明代の千手観音である。一方、劉若晏は著書『頤和園』の中で『佛香閣陳設清冊』を引用し、嘉慶16年には佛香閣の一階入り口の間には「千手大悲菩薩」が、そして蓮

(3) 佛香閣の建つ前に九層の仏塔があったことについて、陳慶英・馬連龍は『頤和園趣聞』をその典拠として引用する(陳慶英・馬連龍 1988, pp.220-221)。しかし、一次史料は劉若晏 1996, pp.74-75 の示すように、乾隆帝の『御製詩集』「第二集」の「志過」である。

(4) P4N, 221b2-223b6; Cf.石濱裕美子 2001, pp.331。

(5) 旃檀佛の奉祀されている弘仁寺は、かつては北京図書館と北京大学医院の間にある養蜂夾道にあった(黄顥 1993, p.28)。

華座上には「千手菩薩」が祀られていたことを示し<sup>(6)</sup>、佛香閣の本尊が以前から観音菩薩であったと述べ、筆者も第一歴史檔案館に所蔵される『佛香閣等處佛像供器清』という文書から、嘉慶12年時点において佛香閣の本尊が観音であったことを確認した<sup>(7)</sup>。嘉慶帝が父である乾隆帝が祀った白傘蓋仏を取り除いて、観音像を祀ったとは考えがたいことから、乾隆帝の頃から佛香閣の本尊は観音菩薩であった可能性は高いと言えよう。

以上の四点から、筆者はチャンキヤ大伝にみる白傘蓋仏殿は佛香閣ではない、と結論するにいたった。

## (2) 白傘蓋信仰のセンターとしての闡福寺

白傘蓋仏を祀る国家鎮護の寺が従来言われてきた佛香閣ではないとすると、その寺はどこに位置していたのであろうか。この問いに答えを出すについては、前述した『パンチェンラマ四世伝』が手がかりを与えてくれる。同伝によると、乾隆45年(1780)9月14日パンチェンラマは白傘蓋寺、極楽世界などを拝観して、弘仁寺において皇帝の長寿祈願の法要を行った後、黄寺に帰還している<sup>(8)</sup>。一方、軍機処の『録副奏折』によって同日のパンチェンラマの行動を確認してみると、「大西天から舟に乗り、闡福寺を参拝した後、弘仁寺(旃檀寺)において法要を行い、黄寺に帰還した」とあり<sup>(9)</sup>、パンチェンラマ伝において白傘蓋寺と表記された寺には、闡福寺という名の寺が対応している事が分かる。

闡福寺は乾隆10年に勅命によって北海北岸の五龍亭の北に建立された大寺でありその建立目的や旧観については、『欽定日下舊聞考』や同書に引用された同寺の碑文によって伺い知ることができる。

朕遵意懿旨，爰出内帑，勅將作葺其舊址，略爲崇飾，寶坊傑豎，香刹雙標。用如幻金剛三昧造大法像，高丈六者三倍之而贏，具慈愍性，有大威神。構層簷以覆之。玉網璇題，金碧照耀，冠於禁城諸刹。上爲慈聖祝釐，下爲海宇蒼生祈祐。始事於乾隆乙丑三月，越明年八月告成，因名之曰闡福(『欽定日下舊聞考』卷一，p.398)。

上記の引用文中に「紫禁城の諸寺の中で最高のものであり、上は皇太后の長寿を、下は庶民の

(6) 現在の佛香閣の本尊が弥陀寺よりもたらされたものであることは 劉若晏 1996, p.78 参照。また, *ibid.* 1996, p.76 の「下層明間安石造神台一座, 上供鑄胎站像千手大悲菩薩一尊。蓮華座上供銅胎千手菩薩一尊」という引用より, 佛香閣の本尊が嘉慶16年当時大悲菩薩(観音菩薩の異名)であったことが分かる。

(7) 筆者の調べ得た限りこの文書が佛香閣の『陳設檔』の最古のものであった。「佛香閣下層明間面南安/石造神臺一座 上供/鑄胎站像千手大悲菩薩一尊 隨蓮花座手拈/哈嚩一疋/蓮花座上供/銅胎千手菩薩一尊 隨/錦佛衣一件/裙子一件」(『佛香閣等處佛像供器清』1a)。

(8) 前注(4)参照。

(9) 『六世班禪朝覲檔案選編』p.278。チベット暦の9月14日は中国暦では一日ずれて9月15日になる。

幸せを祈る場とする」(冠於禁城諸刹。上爲慈聖祝釐，下爲海宇蒼生祈祐)とあることから、闡福寺が国家鎮護を祈念する場として、最高の寺格を授かっていたことが分かり、本尊が「[仏像の基本サイズである]丈六を三倍にした」(高丈六者三倍之)という記述からは、本尊が二十メートルにも及ぶ大佛であったことが分かる。これらはいずれもチャンキヤ大伝に見られた白傘蓋の寺の特徴と一致しよう。また、本尊が「具慈愍性，有大威神」とあるのも、女尊であり、かつ、強力な国家鎮護の力をもつ白傘蓋仏の性格とも一致する。

以上の点から、筆者はチャンキヤと乾隆帝が清朝の国家鎮護を目的として建てた白傘蓋寺とは、北海の北岸にある闡福寺を指す、という仮説を得るにいたった。そこで、この仮説を実証するべく、2003年の夏北京において、闡福寺の現状を調査し、第一歴史檔案館において闡福寺関連の資料を探查することとした。

### (3) 『陳設檔』に見る闡福寺の旧観

2003年9月1日、筆者は第一歴史檔案館において、『陳設檔』の調査にかかった。『陳設檔』の大半は清朝末期に作成されたものであり、記録の残っている箇所にも偏りがある。そのため、乾隆初年という特定の時代の、闡福寺という特定の寺の陳設檔が見つかる可能性は客観的にみて極めて低いと思われたが、ひたすら目録を繰り返していくうちについて『内務府陳設冊(7)』(目録番号413-5-22-7)のno.1742に、乾隆年間という注記のついた『闡福寺殿宇佛像供器陳設冊』を見いだした。この史料を閲覧してみると、驚くべき事にこの陳設檔は乾隆20年すなわち、闡福寺が建立されてわずか10年後の記録文書であることが分かった。そしてこの史料によって、闡福寺の本尊は22m(五丈二尺六寸)にも及ぶ白傘蓋仏であったことが確認でき、先の仮説が正しいことが裏付けられたのである<sup>(10)</sup>。

図1は本史料に基づいて復元した闡福寺の平面図である。この復元図が乾隆13年に作成された『京城全圖』に描かれた闡福寺の絵(図2)とほぼ一致することから、『京城全圖』の正確さも同時に確認することができよう。本史料のうち寺の構造や本尊の配置を伝える箇所は抜粋して本論の末尾に史料として添付した。

以下に、『陳設檔』の記録に基づき、闡福寺の諸堂の配置及び、そこに祀られていた主な仏像の名をたどってみよう。牌楼をくぐると、山門があり、そこには満洲・漢・モンゴル・チベットの四体の文字で描かれた闡福寺の額が掲げられ、一丈六寸の阿吽の仁王尊(哼哈二尊)が祀られる。その北に天王殿があり、ここには三尺六寸の弥勒仏とその両脇に三尺六寸の四天王が祀られる。天王殿の北には東配殿と西配殿が東西に並び、そこには本尊白傘蓋仏の持物や寺内で用いる裝飾

(10) 乾隆52年に編纂された『宸垣識略』によっても、「闡福寺在五龍亭北，又名極樂世界，乾隆十一年建。

有萬佛樓，供小銅佛萬尊。殿內有白傘蓋佛，高數丈，俗稱大佛，有御製碑記(『宸垣識略』卷四皇城二)」と、乾隆52年時点で闡福寺の本尊が白傘蓋の大仏であったことを確認できる。

品などが収められている。その北に闍福寺を建立した際の御製碑文が満・漢、蒙・チベットの二体字ごとを一統の裏表に刻みこんだ石碑が左右に一对並び、その真ん中に三階建ての大仏殿がある。大仏殿の本尊はひときわ大きな五丈二尺六寸の白傘蓋佛であり、本尊の両側には五尺六分の十八羅漢が、背後には北向きに一尺七寸六分の善財童子と龍女を従えた三尺六寸の観音菩薩が鎮座する。大仏殿一階の東西の次の間には西にヤマーンタカ、東にマハーカーラという二護法尊のタンカが掲げられている。

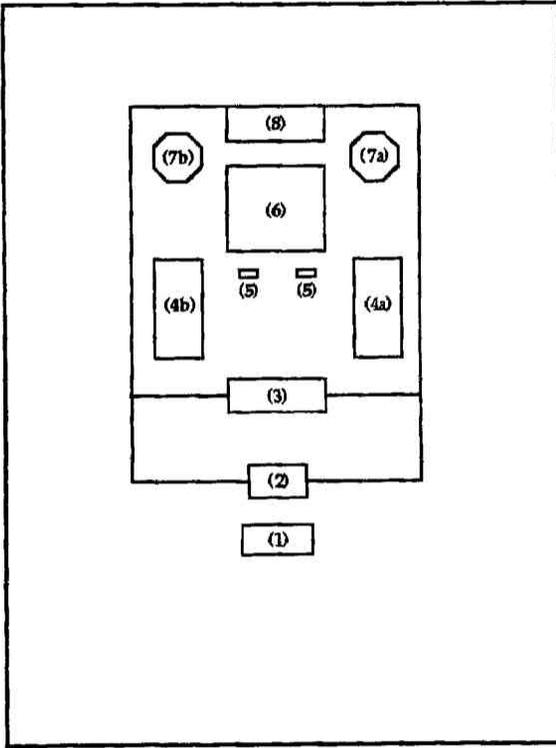


図 1

- (1) 牌楼 (四柱九楼)
- (2) 山門 (三間)
- (3) 天王殿 (五間)
- (4) a. 東配殿 b. 西配殿 (各五間)
- (5) 石碑二統
- (6) 三階建ての大仏殿 (五間)
- (7) 二階建ての八角方亭 a. 毘盧佛亭 b. 八臂観音亭
- (8) 後殿 (五間)

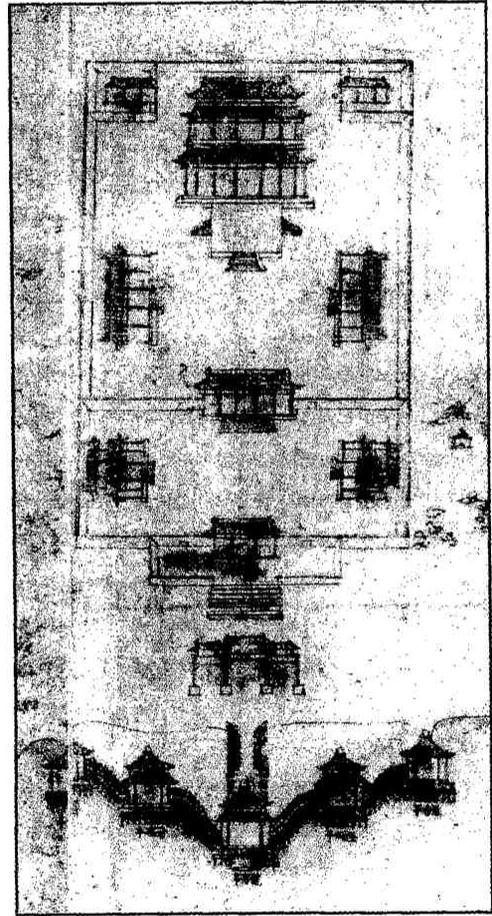


図 2

以上みてきた闡福寺の諸尊のうち、山門の仁王や天王殿の弥勒仏、本堂の羅漢などは中国仏教の寺院莊嚴の伝統に則って配置されたものであるが、本尊である白傘蓋大仏と二護法尊はチベット仏教特有のものである<sup>(11)</sup>。このほかに明白にチベット仏教由来を確認できる尊像としては、本殿三階に祀られたサン・デ・ジク・スムの立体曼荼羅や<sup>(12)</sup>、四百体にも及ぶツァツァ<sup>(13)</sup>仏などを挙げるができる。

大仏殿の北には七尺六寸の毘廬佛と八臂観音をまつる八角亭が左右にならび、その北には寺の最も後方に位置し、無量寿尊を本尊とする後殿がある。無量寿尊は長寿を祈願する仏であり、闡福寺にはこの他にも長寿の仏の仏画や仏像が数多く祀られている。これは、御製碑文にあった「皇太后の長寿を祈願する」というこの寺の機能内容とも一致する。

こうして、チャンキヤ大伝に見られる白傘蓋寺が闡福寺として確定したことにより、チャンキヤ大伝の著者トゥカンが闡福寺と佛香閣を混同していたことも同時に明らかとなった。トゥカンが頤和園の佛香閣と北海の闡福寺を混同した理由については容易に説明がつく。まず、頤和園には萬壽山という人工山があることに対して、北海にも萬壽山という異名をもつ瓊夏島がある。また、両者ともに昆明湖、北海という湖に面しており、頤和園で九層の塔がくずれた乾隆 23 年にちょうど北海の大西天が完成している。このように佛香閣と闡福寺には似た要素が数多くあったため、トゥカンはこの二つの寺を混同したのであろう。

#### (4) 闡福寺の現状

闡福寺は 1900 年の八ヶ国連合軍の北京占領時に略奪を受け、寺としての機能を失った。現在五龍亭の北にはかつての萬佛樓も闡福寺の本堂も、影も形も存在しない。1900 年に日本軍の通訳として北京に入った寺本婉雅は、八ヶ国連合軍の北京占領によって闡福寺が受けた被害について以下のように言及している。

西藏語、蒙古語、満洲語の一切蔵經の版木は旃檀寺の北闡福寺に存せしも、義和団反乱の際仏国兵の爲め、全く烏有に帰しぬ。惜しむべき事なり(寺本婉雅『蔵蒙旅日記』p.99)。

この記述によって、闡福寺の東側にあった經典印刷所(經廠)が壊滅したことは確認できるが、本堂の白傘蓋大仏殿がどの程度の被害を受けたかは分からない。そこで、いろいろの史料をあたって見たところ、闡福寺の大仏殿は八ヶ国連合軍の略奪は受けたものの外観はとどめており、最終的には 1919 年の失火によって失われたことが分かった。そう結論するに至る根拠を挙げると以下ようになる。

まず、1922 年に出版されたジュリエット・ブレドン(Juliet Bredon)の *Peking* では、

(11) 石濱裕美子 2001, pp.28-33。後注(29)参照。

(12) 後注(34)参照。

(13) 後注(35)参照。

Alas, nothing is left of the Wan Fo Lou Temple whose giant image, larger and finer than the one in the Yung Ho Kung was destroyed by fire in 1919 (Juliet Bredon, p.154).

と、雍和宮の大仏よりも大きく、かつ、すばらしい大仏を祀った萬佛樓が1919年に火事で焼け、後には何も残っていない、と記している。一方、以下の『北京風物游覧典故』にも、1919年春に萬佛樓の附近にある大仏殿が失火によって失われたとあり、いずれの史料も「萬佛樓」の大仏殿が1919年に焼失したことを伝えている。

光緒二十六年(1900年)、八国聯軍侵入北京、北海万佛殿内の万尊金佛被搶劫一空、大佛殿内大佛身上的無数珠宝也被盜走、隨後、又一把大火將万佛樓燒毀。1919年春、万佛樓附近的大佛殿及大圓鏡智寶殿等又一次失火燒毀。至此、号称大西天的一片建築群、便化爲滅燼焦土、只剩下了不怕火燒的琉璃閣和九龍壁(『北京風物游覧典故』pp.116-117)。

萬佛樓とは闡福寺の西に接した建築物であることから、これら二つの史料が述べる「萬佛樓の大仏殿」が闡福寺の白傘蓋仏殿を指している可能性は高い。そこで、この推測を裏付けるべく、北京の古い写真を確認していくと、興味深いことがわかった。義和団の乱の翌年の1901年に、今はなき萬佛樓の正面写真を小川一真が撮影しており<sup>(14)</sup>、この写真を手に古い北京の写真を確認していくと、1919年の空撮においても<sup>(15)</sup>、ヘッダ・モリソンが1933-1946年の期間に撮影した五龍亭の写真においてもこの萬佛樓の大屋根が確認でき(Hedda Morrison, p.41)、萬佛樓は1919年以後も存在していたことが分かる。一方、1901年に撮影された北海の写真において萬佛樓の東にうっすらと確認できる闡福寺と思われる高層の建築物は(小川一真2000、第百二十三圖)、1919年の前述の空撮写真にはすでに存在しないため、1919年の春に燃えたという大仏殿は、萬佛樓のそれではなく闡福寺の本堂の大仏殿と結論できるのである。

つまり、闡福寺はまず八ヶ国連合軍の略奪を受け、かろうじて残っていた本堂の建物も1919年の火事によって失われ、以後荒れるに任された結果、中華人民共和国期には經濟植物園に転用されたと思われるのである。

2003年8月30日、筆者が北海北岸の小西天、闡福寺などを訪れた際、大西天のチベット諸寺のうち、西天梵境のみが開放されており、闡福寺、萬佛樓、小西天は敷地整備の最中であつた。半年後の2004年3月27日にこの地を再訪してみると、工事は終わっており、両寺の現状を視察することができた。まず、闡福寺の本堂であつた大仏殿とその西側にあつた萬佛樓はあとかたも

(14)小川一真2000、第百二十五圖。この写真が萬佛樓であることは、写真に写っている竿と碑文の位置が『欽定日下舊聞考』に記された萬佛樓の記述と全く一致することからも明かである。本書を始めとして以下に引用した老北京に関する文献群の多くは、鈴木啓造先生にご教示頂いた。ここに謝意を表したい。

(15)この空撮写真は『北平圖集』のp.138とp.139の間、圖158と159の間に挿入されているものである。圖のキャプション「八年抗戰勝利我空軍巡禮祖國河川、在北海上空致敬時撮(朱介凡珍藏)」から1919年(民国八年)のものと知れる。

なく失われており、現在とりあえず姿のある諸堂としては、闡福寺については、闡福寺の額のかかる山門、天王殿、東西配殿、鐘楼、鼓楼と二統の御製碑文（碑文は表面が摩滅して判読不能）が、萬佛楼については、西太后の復興になる極樂世界、寶積楼、妙相亭などが残存している。

## 2. 乾隆帝の白傘蓋信仰

乾隆帝の白傘蓋仏信仰については、今はなき国家鎮護の寺である闡福寺以外にも、いくつかの証拠をあげることができる。以下に、雍和宮の白傘蓋仏殿、パンチェンラマ四世が乾隆帝の意を汲んで記した白傘蓋儀軌、裕陵の白傘蓋真言など、三つの現存する白傘蓋関連文物を紹介している。

### (1) 雍和宮に見る白傘蓋仏殿

乾隆帝は即位の九年目に雍正帝が即位前に住んでいた邸宅をチベット寺に改め、北京最大の仏教寺院とした。雍和宮と呼ばれたこの寺は、以後宮中の仏事を統括し、清朝の権益をチベット仏教世界において主張する数々の高僧を輩出した。チャンキャ小伝にはこの雍和宮が建立された際の経緯を以下のように伝えている。

甲子年(1744)から新しい寺を建て始め、遅延することなく竣工した。盛大な供養を行った。まもなくこの新しい大僧院の中には学堂も設置された。堅固な外壁をめぐらせた広大な寺域には、その真ん中に集会殿、その右方に仏殿を、左方には護法尊殿(mgon khang)を〔おき〕、受戒殿(bsnyen rdzogs kyi sdom pa 'bog chog khang)、白傘蓋殿(gdugs dkar lha khang)、薬師殿(sman bla lha khang)、インドの学者や行者の像をまつる仏殿、ツォンカパ師弟の仏殿、法輪殿(chos 'khor rab rgyas gling gi lha khang)など、仏の身体・言語・心のよりどころ<sup>(16)</sup>とたくさん仏殿を建てた(CNT1, 49a3-b1)。

雍和宮は闡福寺の建立される一年前に建てられているので、下線部に示した雍和宮の白傘蓋殿も闡福寺と同時期の乾隆帝の白傘蓋信仰の現れの一つとみることができる。現在の雍和宮において白傘蓋殿にあたる殿宇を探してみると、雍和宮の最も北端に位置する綏成殿(lhun grub rdzogs ldan gling)<sup>(17)</sup>が浮かび上がってくる。この堂には、正面に本尊として六手三面形の白傘蓋仏が、その左右には脇士として左手には緑ターラ菩薩、右手には白ターラ菩薩が祀られている。そして、堂内西面には奥から順に龍樹、聖天、無着、アティシヤ(982-1054)、ドムトン('Brom ston 1004-1064)が、東面には同じく奥から順にツォンカパ(Tsong kha pa 1357-1419)、タルマリンチェン(Dar ma

(16) 仏の体の拠り所とは仏像、言葉の拠り所とは仏典、心の拠り所とは仏塔である。

(17) 綏成殿のチベット語訳は同殿にかかる額に記された文字に基づく。

rin chen 1364-1432), ケドゥブジェ (mKhas grub rje 1385-1438), ダライラマ七世 (1708-1757), パンチェンラマ四世 (1738-1780) の諸像が並び、ゲルク派の学問の伝統がインドからチベットにいたるまでの相承の歴史を表現している。

この綏成殿内の諸像がいつごろから現在の配置になったのかは不明である。しかし、綏成殿内に成人の姿でまつられるパンチェンラマ四世が雍和宮の建立年である 1744 年 (乾隆 9 年) に幼児であったことを考えると、1780 年におけるパンチェンラマ四世の北京来訪をうけて鑄造された可能性も含めて、時代が降ってのものと考えられる。

雍和宮にはこの他にも白傘蓋信仰関連の文物が数多く所蔵されており、たとえば、現在視認できる白傘蓋タンカについては、大型のものが雍和宮内に一枚、中型のものが天王殿と薬師殿に一枚ずつ、小型のものが講経殿に一枚、密宗殿に二枚掲げられている。また、『雍和宮志略』p.271 によると、かつて雍和宮の法輪殿の展示ケースの中に乾隆帝御筆の『大白傘蓋儀軌経』と『薬師経』が陳列されていたといい<sup>(18)</sup>、また、同書 p.252 によると、かつて顕教学堂のツォンカパ像の右辺には、白傘蓋仏母像が安置されていたという。

## (2) パンチェンラマが勅命によって記した白傘蓋儀軌

次に、パンチェンラマ四世の北京巡錫の際に現れた乾隆帝の白傘蓋信仰について検討する。『パンチェンラマ伝』のチベット暦 10 月 3 日の条によると、パンチェンラマは乾隆帝の命令により、白傘蓋経の儀軌を著している。以下にその件を引用する。

皇帝が「今、パンチェンエルデニがこの地にいらっしゃり、この地において仏の教えが栄え、政治の上での善事も増えてきた。地上の全ての生き物が幸福になるように、勝者(仏)のお言葉の中から、甚だしく深い威力のある教えを選んで、新しい著作を編まれて、高僧ならびに衆僧に読誦させるなら、めでたくも良きことが大いにおきるであろう。」と申し上げた。これにより、『白傘蓋仏の成就法——甘露の宝瓶——』(bcom ldan 'das ma gdugs dkar mo can gyi sgrub thabs dngos grub bdud rtsi'i bum bzang) という著作を新たに編まれたのである (P4N, 231b6-237a2)。

乾隆帝が「清朝の仏教と政治のために新しい著作を」と望んだことに答えて、パンチェンラマが白傘蓋仏の成就法を完成したのは、死の約一ヶ月前の十月三日のことであった。この著作は『パンチェンラマ四世全集』nya 秩に同じ題名のもと収録されており、そのコロフォンにも著作の動

(18) 2003 年 8 月に筆者が雍和宮を訪れた際、展示室に「乾隆皇帝抄写的《大白傘蓋薬師経》。」という解説のついた経典が展示されていた。そもそも『大白傘蓋薬師経』などという経典は存在しない上、内容は『薬師経』であったため、雍和宮の複数の高僧に解説が間違っている旨を告げた上で、御筆の白傘蓋経の所在を聞いてみたが、彼らはその所在を把握していなかった。

機を示すために上述の乾隆帝の言葉が引用されている<sup>(19)</sup>。ちなみに、この時パンチェンラマがチベット語で著した白傘蓋の儀軌は、満洲語、モンゴル語、漢語版が作られ、その四言語の版は一つにまとめて函装された<sup>(20)</sup>。

### (3) 裕陵地宮の白傘蓋真言

乾隆帝の陵墓である裕陵は、即位の九年目から着工され、歴代清朝皇帝の陵墓の中でも最大規模のものである。乾隆帝の棺が収められた地下の部屋(地宮)の壁面にはびっしりと真言が刻み込まれ、棺が収められた龕の二重の石門を支える四本の石柱には、とくに大きく *hūm ma ma hūm ni svā hā* の七文字が彫り込まれている<sup>(21)</sup>。この真言をチャンキヤが編纂した『滿漢蒙藏合璧大藏全咒』によって調べてみると、地宮の中でもっとも目を引くこの七文字の真言も、白傘蓋仏の真言であることを確認できる<sup>(22)</sup>。

---

(19) コロフォンの主要部分のローマナイズを以下に掲げる。このコロフォンにより、本著作が黄寺で記されたことが分かり、さらに末尾には乾隆帝の万寿と乾隆帝の全ての望みが叶うようにとの祈願文が附せられていることから、乾隆帝の御代の繁栄こそがチベット仏教と全ての命あるものにとっての幸福のもと、とパンチェンラマ四世が考えていたことが分かる。ngos pho brang chen por gser zhal mjal bar yong skabs ^rje btsun 'jam pa'i dbyangs stobs kyi 'khor los bsgyur ba'i rgyal po'i tshul du rol pa gong ma bdag po chen po nas bla ma khyod 'di khar yongs pa'i phyogs 'dir sangs rgyas kyi bstan pa dar ba dang, chab srid kyi legs tshogs rgyas pa, sa steng gi skye 'gro thams cad la bde skyid 'byung ba'i phyir du ^rgyal ba'i bka' las gdams pa zab mo byin rlabs shin tu che ba'i chos shig gsar rtso m dzad nas bla ma ser mo ba dang ldan thams cad la 'don bcug na bkra shis dang dge mtshan rgya chen po yong zhes gser gyi bka' lung phebs pa gus pa chen pos spyi bos nos te....sum rtsen gyi skyed tshal sa la 'phos pa lta bu'i pho brang chen po'i nye 'dab lha khang ser po'i yang steng rang shag tu ^gong ma chen po dgung lo khri phrag khri phrag tu brtan cing, thugs kyi bzhed don lhun kyis 'grub pa'i ched du gsol ba btab ste, gnam skyong dgung lo zhe lnga pa'i zla ba bcu pa'i yar tshes bzang por rang 'dun rtse gcig pas sbyar ba'o. PDG, p. 426, Vol.nya.

(20) 現物は『清宮藏傳佛教文物』no.85 により知ることができる。写真には漢語版の最終ページがうつっており、そこに『薄迦梵白傘蓋佛母成就悉的甘露瓶儀軌經』の題名が見えることから、パンチェンラマの白傘蓋儀軌と同定できる。

(21) 『清東陵』pp.46-47, 『清代宮廷生活』486 図。

(22) この七字真言は白傘蓋真言の九番目の呪文である(『滿漢蒙藏合璧大藏全咒』第五套第二卷第一百十五葉)。

## おわりに

以上、乾隆帝が国家鎮護の仏である白傘蓋仏を、即位の当初から始まって、文字通り墓場に入るまで生涯にわたって信仰していたことを引証してきた。

最後にこの乾隆帝の白傘蓋仏信仰の持つ歴史的意味について述べておきたい。

元朝の創始者であるフビライ=ハーンは即位七年目の至元四年（1270年）に、着工したばかりの大都の玉座の上に白傘蓋を掲げて自らの王権が白傘蓋仏の保護のもとにあることを示した。この白傘蓋は毎年二月八日の白傘蓋の佛事の日になると、玉座の上から御輿にうつされ、大都の街を練り歩いてその不祥を払った<sup>(23)</sup>。このフビライ=ハーンの白傘蓋信仰は『析津志』や『元史』『祭祀志』に記されたことにより当時から広く知られていたと思われる。一方、乾隆帝がフビライ=ハーンを強く意識していたことは、即位の九年目にフビライの故事にならってチャンキャより灌頂を授かったこと<sup>(24)</sup>、パンチェンラマ四世が北京で作成した乾隆帝の転生譜にはフビライが含まれていたことなどから明かである<sup>(25)</sup>。

ここで、乾隆帝の白傘蓋仏信仰が持つ歴史的意義が自ずと明らかになってきたことと思う。乾隆帝にとって白傘蓋仏を祀ることは、フビライとの一体感を感じるにより、チベット・モンゴル人の盟主としての矜持を保つことに役だつものであり、一方、フビライの再来であるとチベット人やモンゴル人に信じさせることに成功すれば、この両民族が乾隆帝の影響力を抵抗なく受け入れる政治的可能性をも秘めたものだったのである。

つまり、乾隆帝が即位の十年目に北海のほとりに闡福寺を建立したことは、同年に行われたチャンキャからの灌頂授与と並んで、乾隆帝によるフビライの再来としての再演行動の一環をなすものであり、その再演行動の目的とは、チベット仏教世界に対して仏教に基づく政治を実践していることを示すことによりこの世界での民心を得ることにあったのである。

重要なことは、乾隆帝のチベット仏教信仰を私的な行動として矮小化するのではなく、チベット仏教世界内における政治的行動と解し、その信仰内容の一つ一つについて、チベット仏教世界の文脈の中における歴史的意味を正しく読み取っていくことなのである。

---

(23) フビライ=ハーンの白傘蓋仏信仰については、石濱裕美子 2001, pp.26-33 を参照。

(24) 典拠はチャンキャ小伝 CNT1, 52a1-53a4; Hans Rainer Kaempfe 1976, p.35 を参照。

(25) パンチェンラマ四世の記した乾隆帝の転生譜については Uspensky 2002 を参照。乾隆帝の前世にフビライが含まれていることについては *ibid.* p.221 を参照。

史料『關福寺殿宇佛像供器陳設冊』

1a

關福寺山門外

四柱九樓牌樓一座 上嵌石匾一面 南面性海 有寶  
北面福田 有寶

山門三間 外簷掛

斗匾一面 關福寺木胎貼金四樣字<sup>(26)</sup> 有寶

哼哈二尊<sup>(27)</sup> 增胎坐像法身各高一丈六寸

.....

2bl.7

天王殿五間外簷掛斗匾一面 天王殿內

明間供

彌勒佛一尊 減胎坐像法身高三尺六寸見肉泥金衣紋飾掃金

3al.7

御筆錦邊臥匾一面 宗乘圓鏡 有寶

左右金柱上掛

御筆錦邊對聯一副 妙華普現無窮境 有寶  
慧日常懸自在天

3b

兩山供

天王四尊 增胎坐像法身各高三尺六寸

.....

1.8

東配殿五間

黃緞簾刷三個 隨黃布簾刷三個

4a

西配殿五間

黃緞簾刷三個 隨黃布簾刷三個

院中設傘一柄 隨石座

白色緞傘衣一分 隨白色布傘衣一分

紅絨繩二根

石碑二統

三重簷佛樓五間

上簷掛九龍斗匾一面 大雄寶殿 木胎貼金字 有寶

(26) 四樣とはチベット語，滿洲語，モンゴル語，漢語の四体字で額が記されているという意味。

(27) 阿吽の金剛力士像のこと。哼とは日本の仁王像の吽形，哈とは阿形の仁王像にあたる。

中簷掛九龍臥匾一面 極樂世界 銅鍍金字 有寶

下簷廊內掛九龍臥匾一面 福田花雨 銅鍍金字 有寶

左右金柱上掛九龍邊對聯一副 真諦別傳超妙莊嚴路  
能仁權應現常清淨身 銅鍍金字 有寶

白傘蓋佛一尊 減胎站像法身高五丈二尺六寸項掛

.....

5bl.2

須弥座上供

接引佛一尊 銅胎站像法身高一尺四寸六分

紅片金邊金絲袈裟一件

倭緞金邊金絲緞袈裟一件 上嵌

金火焰一個 重一錢  
上嵌

.....

6al.7

御書金剛經一部 紅雕漆套

.....

6bl.2

彩漆嵌玻璃銅七珍<sup>(28)</sup>一分

.....

7al.8

兩山供

羅漢十八尊 增胎坐像法身高五尺六分

7bl.5

北面背板上掛

石青片金邊畫像佛五軸計番像佛三十五尊

.....

l.9

樓下背板後向北懸山內供

8al.1

觀音菩薩一尊 減胎站像法身高三尺六寸

米色錦緞披肩一件

米色錦緞裙一件 象牙珠纏絡琉璃墜角

金纓絲五佛冠一頂 連青倭緞襯共重十一兩  
上嵌

---

(28) 七珍とは仏前に供養におく輪王七宝 (rgyal srid sna bdun) のこと。

.....  
9bl.1

左右供

善財龍女二尊 減胎站像法身各高一尺七寸六分

龍神一尊 減胎站像法身高二尺六分

從神一尊 法身高一尺七寸六分

懸山上供  
.....

10a

東西二次間背板上向北掛

蟒緞邊畫像護法二軸 西間 厄爾里克罕  
東間 嗎哈嗎拉<sup>(29)</sup>

.....  
1.6

二層樓上向南供

三世佛三尊 減胎坐像法身各高三尺六寸

黃粧緞褥墊三個

中一尊手托涅白套紅玻璃鉢一個 左右設

10b

堆花香袋挑播二首 隨洋漆木座

須弥座上供銀七珍一分 每件重五兩共重三十五兩

上共嵌

珊瑚珠十八粉

紅油供案三張 中案上供

銀鍍金嚙嚙<sup>(30)</sup>一個 計重十八兩隨花梨木座

左右供錫底木胎包廂銀塔二座 八達馬鍍金連胎並珠石錫底  
共重三十六兩 內上嵌

大小松石六十七塊  
.....

11al.2

左右供銀嚙吧壺<sup>(31)</sup>二件 每件重十四兩 共重二十八兩  
上共嵌

---

(29) 厄爾里克罕はモンゴル語の *erliy qayan* の音写で護法尊ヤマーンタカのこと。嗎哈嗎拉はサンスクリット語の *Mahākāla* の音写で同じく護法尊で大黒天のこと。

(30) 嚙嚙とはサンスクリット語の *maṅḍala* を写したもので、仏教の須弥山世界観に基づき金属などで全世界を象ったもので、儀式などの際に供養のために捧げられる。

(31) 嚙吧とは *bum pa* の音写であり、チベット仏教で儀式の際に用いる水瓶のこと。

.....  
1.7

鍍金銅輪一對 上嵌

三色玻璃珠一百四十粒

左案上中供鍍金銅塔一座 上嵌

11b

五色玻璃珠一百九十粒 隨花梨木座

霽紅磁瓶一對 隨花梨木座

右案上中 供銅底銀包廂塔一座 連銅底胎珊瑚松石珠  
共重二十八兩 內上嵌

1.8

左右鍍金銅塔一對 上嵌

.....  
12a1.3

銀鍍金輪一對 連胎珊瑚松石共重十八兩  
內二面上嵌

.....  
1.6

西次間向南掛

石青粧緞邊畫像藥師佛一尊 上掛

黃綾佛幔一個

.....  
12b1.2

左右掛

石青片金邊畫像無量壽佛二軸 計六尊各隨黃綾幔二個

東次間向南掛

石青粧緞邊畫像釋迦佛一軸 上掛

黃綾佛幔一個

.....  
1.9

左右掛

13a

石青片金邊畫像無量壽佛二軸 計六尊隨黃綾幔二個

東西兩山對面供佛四尊 內

毘盧佛一尊

金剛佛一尊

藥師佛一尊

阿弥陀佛一尊 減胎坐像法身各高二尺六寸  
見肉泥金衣紋篩掃金

1.8

左右供

八大菩薩八尊 減胎坐像法身高二尺六寸  
見肉泥金衣紋篩掃金

13b1.5

左右板牆上掛

石青片金邊畫像無量壽佛八軸 計四十尊

黃綾佛幔八個

面北中供無量佛壇城龕一座 龕上欄杆內供

紫檀木匣一個

14a

左右供減胎金漆塔二座 玻璃券門通高五尺六分

1.7

左右板牆 上掛

片金邊畫像無量壽佛二軸 計十尊

東西二次間中供三塔龕二座 內供

14b

邁達里佛<sup>(32)</sup>二尊 減胎站像法身高二尺三寸五分

左右供

金剛菩薩二尊 減胎站像法身高一尺八寸六分

普賢菩薩二尊 減胎站像法身高一尺八寸六分

兩邊供亭式龕四座 內供

無量壽佛二尊 銅胎坐像法身各高五寸六分

釋迦佛二尊 銅胎坐像法身各高五寸六分

兩邊板牆 上掛

片金邊畫像佛四軸 計十二尊

15a

黃綾佛幔四個

(32)モンゴル語の mayidari の音写。チベット仏教における弥勒菩薩を意味する。先述の山門に祀られた弥勒佛は中国仏教の弥勒であり、日本仏教の布袋尊にあたる尊格である。

亭式龕上掛玻璃珠燈十六對

1.7

三層樓上明間供

旃檀佛<sup>(33)</sup>一尊 減胎站像法身高三尺六寸

18bl.2

東次間面南供廂玻璃掛龕 内供

無量壽佛八十一尊 香胎坐像法身各高二寸三分

1.6

西次間面南供廂玻璃掛龕 内供

無量壽佛八十一尊 香胎坐像法身各高二寸三分

19a

南面明間 内供

秘密佛壇城一座 隨黃布夾一套一個

左右供銀輪二件 共重七百六十八兩  
内五色哈噠一個

東次間供

上勒王佛壇城一座 隨黃布夾一套一個

西次間供

呀們噠嘎佛壇城一座 隨黃布夾套一個<sup>(34)</sup>

兩山中供玻璃龕無量壽佛壇城二座 内供

無量壽佛十八尊 銅胎坐像法身高一寸六分  
隨楠木方香九二個

19b

兩山左右供洋漆亭式龕四座 内

北二座供無量壽佛十八尊 銅胎坐像 十尊法身高二寸六分  
八尊法身高一寸九分

南二座供五方佛十尊 銅胎坐像 法身高二寸六分

四角五塔龕四座 内供

(33) 釈尊在世時に旃檀木を削って作成され、インドから将来されたという中国きつての名像。オリジナルは前述の弘仁寺にあるので、これはそのコピーであろう。

(34) 三階の南面の間に安置された、秘密佛壇城、上勒王佛壇城、呀們噠嘎佛壇城の三つはそれぞれ『秘密集会タントラ』(gsang 'dus)『勝樂タントラ』(bde mchog)『金剛怖畏タントラ』('jigs byed)に基づく立体マンダラを指す。この三マンダラはチベット仏教の最大宗派ゲルク派が尊んだもので、サン・デ・ジク・スム(gsang bde 'jigs gsum)と総称される。

礫<sup>(35)</sup>佛四百尊 増胎坐像法身高四寸六分

.....

1.7

樓上北面掛

御筆錦邊臥匾一面 有大威德 有寶

御筆對聯一副 放百寶無畏光明歷劫智珠長朗 有寶  
入三昧甚深微妙諸方心印自圓

20a1.4

院內壁護法杆三座 隨藍緞纛三個隨布纛三個  
紅絨繩九根 隨石座

東西八角重簷方亭二座 內

東一座供毘盧佛一尊 銅胎坐像面像泥金法身高七尺六寸衣紋燒古

香水池欄杆上供木胎黑漆三供四分五供四分 木胎貼金靈芝四對  
木胎紅油檟燭八對

拜墊一分 隨紅白種各一塊

20b1.2

西一座供八臂觀音一尊 銅胎燒古面像泥金法身高七尺六寸  
千佛蓮花座傘蓋上掛蓮花幡八首

.....

1.7

重簷後殿五間 外簷掛

九龍臥匾一面 真實般若銅鍍金字 有寶

九龍邊對聯一副 正法眼長明慧燈不滅 銅鍍金字 有寶  
無漏身自在性海遙通

21a

後殿內供無量壽佛九尊 見肉泥金衣紋鍍金法身各高五尺六寸

中蓮花座上供無量壽佛一尊 見肉泥金衣紋燒古  
法身高三寸六分

紫檀須彌座背光三面踏垛龕 上供

無量壽佛三千六百八十一尊 銅鍍金法身各高五寸六分

.....

22a

兩次間掛

錦緞蓮花歡門二個

錦緞蓮花檐十二首

洋漆畫片羊角燈二對

.....

22b

乾隆二十年 月 日

(35) チベット語の tsha tsha。粘土で作った型に泥土をいれて抜いて作る仏像のこと。

## 参考文献

dkon mchog 'jigs med dbang po, 'jam dbyangs bzhad pa II., *rje bla ma srid zhi'i gtsug rgyan paN chen thams cad mhyen pa blo bzang dpal ldan ye shes dpal bzang po'i zhal snga nas kyi rnam par thar pa nyi ma'i 'od zer*. 1785-1786. (P4N)

chu bzang ngag dbang thub bstan dbang phyug, *rdo rje 'chang lcang skya rol pa'i rdo rje ye shes bstan pa'i sgorn me dpal bzang po'i rnam par thar pa dad pa'i padma rnam par 'byed pa nyi ma'i 'od zer*. 1787. Ed. Peking, 151fols. Reproduced in *Nyi ma'i 'od zer: Die Biographie des 2. Pekiner lCang skya Qutoqutu Rol pa'i rdo rje (1717-1786)*. by Hans-Rainer Kaempfe. *Monumenta Tibetica Historica*, An.III, Bd. 1. St-Augustin : VGH Wissenschaftsverlag, 1976. (CNT1)

lcang skya rol pa'i rdo rje, *rgyal pos mdzad pa'i manydzu rgya hor bod yig bzhi yi skad shan sbyar ba'i bka' 'gyur gyi sngags tshang bar bkod pa* (『御製滿漢蒙古西番合璧大藏全呪』). 『滿漢蒙藏合璧大藏全呪』中国民族摄影艺术出版社, 1995 (KNK)

thu'u bkwan blo bzang chos kyi nyi ma, *khyab bdag rdo rje sems dpa'i ngo bo dpal ldan bla ma dam pa ye shes bstan pa'i sgron me dpal bzang po'i rnam par thar pa mdo tsam brjod pa dge ldan bstan pa'i mdzes rgyan*. 1798. (CNT2)

paN chen blo bzang dpal ldan ye shes, *bcom ldan 'das ma gdugs dkar mo can gyi sgrub thabs dngos grub bdud rtsi'i bum bzang*, ff.1a-25b (pp.569-618), Toyo Bunko Zogai No.4306. (PDG)

『日下舊聞考』乾隆 39 年于敏中編, 北京古籍出版社, 1983

『乾隆京城全圖』乾隆 15 年, 興亞院華北連絡部政務局調查所編, 用北京故宮博物院藏本景印付 (1 冊), 1940

『宸垣識略』乾隆 53 年吳長元編, 北京古籍出版社, 1983

『佛香閣等處佛像供器清』第一歷史檔案館目錄番号 413-5-22-3 No.5340

『闡福寺殿宇佛像供器陳設冊』第一歷史檔案館目錄番号 413-5-22-7 No.1742

石濱裕美子『チベット仏教世界の歴史的研究』東方書店, 2001

王湘雲「清朝皇室, 章嘉活佛与喇嘛寺廟」『西藏研究』1995-2, pp.114-119

小川一真『清代北京皇城写真帖』学苑出版社, 2000

金梁編『雍和宮志略』中国藏学出版社, 1994

黄顯『在北京的藏族文物』民族出版社, 1993

故宮博物院編『清宮藏傳佛教文物』紫禁城出版社·兩木出版社, 1992

朱傳譽編『北平圖集 建築篇』天一出版社, 民国 65 年

中国第一歷史檔案館・中国藏学研究中心合編『六世班禪朝覲檔案選編』中国藏学出版社, 1996  
陳慶英・馬連龍訳, 土觀=洛桑却吉尼瑪著『章嘉国師若必多吉傳』民族出版社, 1988  
寺本婉雅『藏蒙旅日記』芙蓉書房, 1974  
萬依・王樹卿・陸燕貞『清代宫廷生活』商務印書館香港分館, 1985  
李鳳祥編『北京風物覽典故』北京旅游出版社, 1989  
劉若晏『頤和園』國際文化出版公司, 1996  
『清東陵』中国世界語出版社, 1997

Hedda Morrison, *A Photographer in Old Peking*, Oxford University Press, 1985

Juliet Bredon, *Peking*, Oxford University Press, 1982 (First published: Shanghai : Kelly & Walsh, 1919)

Uspensky, "The Previous Incarnations of the Qianlong Emperor according to the Panchen Lama Blo bzang dpal ldan ye shes".—*In Tibet, Past and Present: Tibetan Studies I. Proceedings of the Ninth Seminar of the International Association for Tibetan Studies*, Leiden 2000., Ed. by Henk Blezer. Leiden, etc., Brill, 2002, pp. 215-29.

(ISHIHAMA Yumiko 早稻田大学教育学部)